スポーツの身体論（II）

保健体育科教育教室　入　江　克　己

前稿（I）においてはスポーツ技術に関する機械論的な解釈ならびにスポーツにたいする理性主義的な理解の限界を指摘するとともに歴史的，社会的な過程をとおして技能領域一般が人間の諸々の活動領域から廃棄されてきたことの問題性を明らかにしようとした[1]。

続いて本稿ではスポーツの構造を（1）構想力（2）時間，空間（3）道具（4）集団（5）制度においてとらえ，それらの技術的な構造が錯綜する空間において展開される身体性の世界を素描し，かつその意味を問題にしたい。

5．スポーツ技術の存在論と構想力

1．スポーツと構想力

近代の哲学は，「ただ知性の神性のみを証明したにすぎず，単に知性をしかも抽象的な知性のみを神的な絶対的な存在と認めたにすぎない[2]」と近代の哲学による理性の絶対化を批判したのはほかならぬフォイエルバッハであった。フォイエルバッハは，この批判のうえにたって「真理，現実性，感性は同一である。ただ感性的存在だけが，真の存在，現実的な存在である。ただ感性的諸器官を通してのみ，対象が本当の意味において与えられ，思考自身だけによってなのではない[3]」と認識における感性の意義を提起したのであるが，理性と感性を統合した全的存在としての身体の解放は，自然的かつ社会的な存在としての人間の文化にたいする諸々の要求を人間的欲求の総体的な構造のなかへと改めて位置づけなおすほかはないであろう[4]。

この理性と感性を統一した全的存在としての人間像をえがき，両者を統合する契機として遊戯をとらえようとしたのが，周知のようにシラーであった。シラーは，人間の遊戯衝動を「感性衝動」と「形式衝動」とに分け，この二つの衝動を結合し，統一した形態としてみたのである。

シラーにとってこの感性的衝動とは「人間の身体的存在，すなわちその感性的本性に発し，人間を時間の枠のなかへ置き，質料とするはたらき[5]」をするものであり，シラーは，この質料を「変化ないし時間をみたす実在性[6]」であると規定したのである。また形式衝動の概念についてシラーは，「人間の絶対的存在，すなわちその理性的本性から発し，人間を自由にし，その現象の多様性を調和させ，状態の変化にもかかわらずその人格を確保することに努めるものです[7]」といっている。

遊戯衝動に関するシラーのこれらの規定は，感性衝動が変化と時間，空間における内容，いいかえれば広義の生命を対象とするものであることを示唆しており，それにたいして形式衝動は，その生命に時間的，空間的な形式とともに法則（遊戯体系）を与えるものであることを意味していると

いえるだろう。そして，この両者の衝動を融合した遊戯衝動は，「時を時のなかで廃棄し，生成を絶対的存在に，変化に，同一性を結びつけるようにしむけるもの[8]」であり，それは「生ける形態」を対象にしているとシラーはいう。

このようにシラーは，遊戯を理性と感性の統一的契機としてとらえるとともに「人間においては身体器官と同様に，想像力もまた，自由な運動と質料的な遊戯とをもつものであって，そこでは形態への関係は一切なしに，単に自分の力と無拘束性だけを楽しむのであります[9]」と述べ，想像力が物理的必然や道徳から人間を自由へと開示するものとしてぬきがたく存在していることを力説している。われわれは，シラーのいう想像力を勝義の意味での「構想力[10]」(Einbildungskraft) としてとらえることができるだろう。

後述するように，この遊戯における構想力がさまざまな遊戯形態に一定の意味をあたえ，固有の意味範囲を構成するのである。このことについては多くの遊戯理論において強調されているが，たとえば，ジャック・アンリオは，「遊びにおいて特徴的なことは，構造（規則体系としての遊び）に対する意味（遊ぶこと）の優位である。構造が意味を生みだすのではなく，意味が構造を存在させるのだ[11]」とかいている。

このアンリオのいう意味とは，遊戯における仮象への喜びあるいは想像的な世界への埋没を可能にさせる能力（構想力）によって形成されるものであるといえよう。一方フィンクは，その独創的な遊戯論のなかで「われわれが遊びの世界を『仮象』と表わすならば，この遊びの世界の仮象を明確にその他の周知の対象から区別することがまさしく肝要であろう[12]」と遊戯的構想力の独自性を強調するとともにその構想力によって「われわれは存在と仮象をそのまま混ぜ合せ，われわれの毎日の環境世界の優れて現実的な事物より高次の真理を暫次保証する仮象めいたものに謎めいた喜びを抱く[13]」ことができるといっている。

われわれの遊戯という活動領域は，構想力を媒介することによって意図的に自らをその他の諸々の現実的な活動の外におきかえると同時に，その限りとられた空間，時間を現実にたいして閉ざし，自己完結的な固有の意味的空間と時間を獲得する行為であり，したがって「人間的遊びとは，内的世界事物の一般的根拠性のさ中で，生の遂行が無根拠的な自己内振動 (ein Insichselberschwingen) が支配的な世界の象徴として輝き出る仕方[14]」なのである。

2．構想力と技術

ところで，遊戯における仮象，想像の世界への参入は，直観的な判断力の過程である身体の技術過程に依存することなくしては不可能である。この技術過程へと自らを沈潜させることによってわれわれは，はじめて現実と非現実，日常性と非日常性といった生活空間にかかわる仕方を自由に変換し，遊びとることができるのであり，その変換を可能にさせているものがほかでもない構想力なのである。われわれは，この構想力を媒介としたスポーツの技術過程において日常性の存在様式である心身にたいする二元的な自覚を捨象することができるのである。

われわれは，スポーツという非日常性の世界から一瞬夢から覚めたように現実の世界へと引き戻され同時に，次の瞬間には，いつの間にな無意識のうちにスポーツという虚構的な世界の真只中にあるという二重の錯綜した構造のなかにおかれることを経験する。このようにわれわれは，スポーツの空間において内部感覚とともに外部感覚をももつことができ，かつまたスポーツ空間を主観化し，同時に客観的なものとして対象化することもできるのである。われわれは，こうした二重の意識構造のなかで自らの身体にたいして立体的な感覚をより鮮明にもつことができるのである。

三木清は，構想力をパトスとロゴスの結合したものとして規定し，パトス的情念のロゴス化の過程に働く作用としてとらえた。そして，パトスを主体性における身体として生理学的な対象としての客観的な身体とは明確に区別し，実存的な身体の在り様としてみるとともに構想力を人間の技術過程のなかにみて次のように述べている。「構想力は決して単に主観的なものではない。かえって構想力の自由な作用において主観的なものは形となって主観から超出する。人間の技術的行為，意識の内部における現象にとどまらないこの行為のうちにこそ，構想力の論理が認められる。[15]」

中井正一も「技術の世界で，人間自ら謬り得ること，その謬りをふみしめて，自らの行動を自らの対象として，その媒介によって，新たに自らの行動を創造しなければならないこと[16]」，この創造力がすなわち構想力であるといい，そこに人間の主体性が存在するとかいている。

構想力をスポーツの技術に即していえば，スポーツという遊戯的世界を日常性の空間から限りとり，創出する感性的能力を内に含みながら，さらに感覚運動的な能力としてスポーツ・ゲームの空間，場面を自己の立場以外の視点からとらえなおすという視点変換の能力，ボールの速度，軌跡のみならず相手，味方チームのメンバーの意図を把握する能力，戦術，戦略の予知能力，身振り――まなざしの意味を感受する能力，ゲーム場面のダイナミックな把握とそれを再構成する能力等を意味しているといえるだろう[17]。そこには当然のことながら創造的想像力が要求される。構想力にうらづけられた技術とは，ある意味で自己の現在的な存在を否定しながら創造された未来的な自己へと変換する一種の表徴能力をあらわしているのである。こうしてわれわれは，スポーツにおける遊戯行動の内的世界に自己を忘却し，内的世界において出合うものの意味関係へと投企するのである。この自己忘却こそが遊戯における世界投企の最も普遍的な様式であるといえるだろう。構想力の射映としてのスポーツの技術過程をくぐりぬけることによってわれわれは，自然的で生物的な生命の限界を超える可能的な契機を自らのものにすることができる。こうした構想力にたいする了解なしには自己完結性，美的領域，虚構性，限定性，規則性といった遊戯の固有の概念を主体的に理解することはおそらくできないであろう。

三木清は，技術を「習慣」と「構想力」の矛盾とその統一のうちにみいだそうとしたが，スポーツにおける技術の存在論的な根拠として遊戯共同体をその根底から支えている構想力とは，間主観的な共同構想力としてとらえられるべき性格のものである。

身体文化がもっている技術的な秩序とは，その共同構想力を媒介にしながら自然的秩序と人間的秩序を止揚する相互変換の行動の論理を包摂した文化遺産なのである。

3．技術的構想力と身体

一般にわれわれの身体にたいする意識というものは日常的にしばしば経験されるように，たとえば病気であるとか疲労あるいは倦怠などの場合に典型的に感じられることであるが，自らの身体をよそよそしいもの，あたかも自己の身体ではないものとして対象化する場合に生じる。そうした身体的な状況の下では自己と身体とのあいだに二元的な異和感をもつとともに激しい葛藤がくりかえされ，究極的には精神的な疎外さえまねくことになる。このように精神の全面的な疎外という現象は，身体が自らにとってある種の無意味な事実に埋没することによってもたらされるといえるのである。

篠原助市は，かつて身体を意志力，すなわち理性の対象として支配され，従属されるべき道具としてえがいたが，近代以降において身体は，絶えず自我に対立し，拮抗するものとして定立されてきた。そこにはすでに身体と自我との分裂，つまり人間疎外が図式化されているといえる。このこ

とについてA・ローウエンは，近代の人間疎外が身体と情意の解体，そして身体そのものの否定に起因するとして次のようにいっている。「身体にたいする偏見は，人間の動物的本性と同一視することに由来する。文明化は，人間を動物的次元から向上させる漸次的な努力であった。この努力は人間に他に類をみない自我を創出し，自我は彼の輝く精神を解放し，意識を拡大し，膨張させてきた。人間の身体は洗練されていく，その感受性はより鋭くなり，その多様性は増加していった。しかし，まさにその過程において，動物性の現われである身体は否定されていったのである[18]」と。

身体が動物性の表現であるかどうかについて今は問わないにしても，近代において身体が意味ある存在としてではなく，没価値的で無意味な存在へと下落させられてきたことは明らかである。

こうした身体の疎外から全面的に回復する道は，意味の担い手である身体の単なる機械的な運動によってではなく，意味的な運動の過程のなかに求められるといえる。この場合の身体の意味的な運動とは，既に述べたように構想力を媒介にした技術的運動によって身体をとりまく環境的世界にたいして多様な意味と空間的な拡がりを投企することを意味している。それというのも環境の意味は決して静的な身体や機械的な運動によって知覚されるのではなく，環境的世界にたいする運動によってはじめて意味への接近が実現されるからにほかならない。

われわれの眼をとおして得られる知覚さえも，決してわれわれの眼に生ずる単なる感覚そのものではありえない。それは，自らの固有の世界として経験される世界であり，われわれの身体に直接的にかかわる事象として経験されるのである。したがって，一般にわれわれの身体運動の対象は，常にある一定の身体性を獲得するといえるのである。この環境的世界にたいする意味的な運動を媒介にした接近の過程を市川浩は，「統合」と呼び，そこでくりひろげられる身体は，環境世界にたいして能動的に問いかけ，かつ環境世界からの呼びかけで応答する，はたらきとしての具体的な身体であると規定している[19]。

個性といわれるものは，そうした環境世界に働きかける仕方をあらわしており，精神とはいってみれば環境世界に働きかけ，その結果与えられた身体の変容の存り様なのである。そして，この身体の変容とは，「世界のなかで外界の物事からの働きかけによって私たちの身体が蒙る変様[20]」であり，それを「働きあるいは機能の面で捉えれば，活動する身体の自己意識が精神[21]」なのである。

スポーツにおける技術的構想力によってわれわれは，自我と身体そして環境的自然とを一つの連続した空間に融合し，共通感覚的な世界を形成することをとおして身体を事実への埋没から解放するとともにスポーツ共同体へと昇華させる。

したがって，スポーツにおける自然とは，自我と身体と自然との関係を機械的な因果律において描こうとする近代に特徴的な自然観とは明らかに質を異にしているといえるだろう。環境的世界がますます近代化され，合理化されていくという現代の文明的状況にたいしてわれわれがスポーツの世界への志向を一層強めている基本的な理由はここにある。

4．直観的技術と身体

一般にわれわれは，スポーツにおいてルール（ゲームのタイム制，コートあるいはネットの形態と大小，用具――ラケット，ボール等――の形態と機能）によって様々に条件づけられたある典型的な随意運動の図式――それを客観的法則と呼ぶにはあまりにも不安定であるが――を模倣し，反復することによって記憶する。

その典型的な運動図式は，内部感覚を基礎とした感覚――運動機構を包括したものであり，模倣し，記憶することによってその運動図式は，次第に自明なものとなり，親しみ深いものとなる。わ

れわれは，ある象徴的な行動形態を身体的に下書し，模倣し，反復することによって運動感覚的に記憶し，かつそれを想起する。その過程で運動図式と生理学的，解剖学的に指示された身体図式とのあいだの矛盾，対立は徐々に捨象され，やがて消失する。

われわれは，この両者の拮抗，対立というかべの消失によって外界や環境的世界にたいして意味をもつものとして知覚することも，また環境的世界と自己とを相互に能動的に関係づけることもできるのである。ルノーがいうように，「模倣とは多くの場合，ある孤立した身体部位での身振りの模倣というような極めて狭意の意味において考えられてきた[22]」が，「模倣とはある運動シェーマの取り入れ同化であるよりは，むしろコミュニケーションの一形式なのであり，自己身体の限界への挑戦，その意図的拡大なのである。模倣によって主観と主観という意味における対人関係が身体と運動の次元において設定され得るのである。[23]」

ラケットやバットでボールを打つ，泳ぐ，投げる，走るといったスポーツの技術的行為とは，ある表徴的な制度を運動的に記憶し，想起し，再現する過程であり，その過程は，実は反復可能な特定の時間，空間を自然にたいして限りとると同時に，それらと交渉するコミュニケーションの過程でもある。ところで，サッカーやバスケットボールのゲームにおいてある一定の条件のもとで偶然に成功したシュートを記憶にそれを再現しようとする場合にわれわれは，かって成功したシュートという過去的時間とその場面，すなわち過去的空間を再構成しようとする。それはある事物を記憶し，一つの具体的な絵として空間に再現し，表現する芸術や言語の記憶と想起ということと全く異質のものではない。ただスポーツにおいて特徴的であるのは，技術の記憶と再現の合目的的性を否定しえないにしても，この潜在的な可能性だけが存在しているだけであり，この技術的記憶と想起の過程が直観的で無意識的であるということにある[24]。

こうした身体の自動的な運動をメルロ・ポンティは，身体的了解と呼んだが，これらの運動過程は，たんにスポーツのみならず舞踏，楽器演奏等においても共通してみられる技術的現象である。

それはまた日本的なことばとしてしばしば表現される，あの内感としての「カン」が示唆しているところのものであり，直観的な技術をその根底から支えているのである。「カン」の存在論的な核心性は，心身における主体と客体の両義性が消失し，知覚されることのない身体的な精通のなかへと沈潜していくことなのである。

したがって，「人間とは，身体にそなわった感性的『直観』の能力にもとづいて存在者のあり方を了解しながら，世界に対して，身体をもって『行為』するところの存在[25]」であると定義することもできる。われわれが身体文化という場合の「身体」とは，そうした身体の概念を基本的な原理とし，身体性の世界へと投企する欲求を固有の推進力と存在しているのである。

スポーツの技術は，人間を欠如存在としてとらえたアーノルド・ゲーレンが規定したように，確かに「器官代理」，「器管凌駕」といった性格を一面にもつものである[26]。しかしながら，ゲーレンのこの技術に関する規定は不十分であり，むしろ「われわれの人間的表現機能の一環として自己昂揚への衝動を強力にあらわす器官の超過表現[27]」と規定した方がより適切であると考える。

技術というものを既述のようにとらえようとすれば人間的欲求の射映として戸坂潤が規定したように「主観的技術」の枠を超えることはできないように思われる。そして，この場合の主観とは，「場所的自己における創造的直観[28]」としてのそれであり，スポーツ的実践のみならず「知的思考，道徳的実践，芸術制作，宗教的啓示など，すべての意識作用の根底にはたらく未分化で一体的かつ創造的な統一力の発現[29]」，すなわち構想力を意味している。それゆえ主観とか直感とかいわれるものは，人間にとって決して非合理的な認識のあり方ではなく，合理的意味あいさえもっているので

ある。

中井正一は，技術の論理を「凡ゆる無を有に，凡ゆる有を無に揺り動かし[30]」，自然的秩序を「人間的秩序に結合するために，一方を他方に，他方を一方に，震憾し，蕩揚しているところの媒介的契機[31]」であり，「自然の論理が一方的であり，直流的であるならば，技術の論理は，相互変換的であり，交流的である[32]」といいあらわしている。この技術の論理のうちに環境的世界の変化とともに流れ，かつ立ちどまりながら環境的世界にたいして意味付与的にかかわろうとする身体を見い出すことができる。われわれは，スポーツの世界においてその固有の時間，空間，道具，集団，規則体系，制度との相互交換的なコミュニケーションの過程をとおして環境的世界を意味づけるのである。

6．スポーツの技術的世界と身体性

1．スポーツにおける時空間の身体性

ジャック・アンリオは，スポーツには一定の時間的経過のなかでポイントを競いあうという時間的なリズムとルールが特徴的であり，「たいていのスポーツにおいては，現実的時間の計測が重要で，また，ほとんどの場合に本質的なものとして介入してくる[33]」とスポーツにたいする現実的時間の本質的な規定性をあげている。

アンリオがいうように，確かに最も組織だった遊戯であるスポーツにおいてはタイム制あるいはコートの様々な幾何学的な図形，ネットやゴールの高低と大小等といった具合に時間のみならず空間に属する身体の運動形態がルールによって形成され，かつ終るということから，そこには計測可能な量的時間，空間が深く介在していることを特徴としている。事実，一般に人間身体の運動感覚には――スポーツ行動に特に顕著であるように――眼球の動き，四肢の動きあるいは身体全体の移動と位置の変化が共に与えられる。そして，この運動が場所や位置の変化であるかぎり空間性を指示するとともにそれが一定の変化を生起し，身体運動が客観的に計測されるという点において絶対的な時間の経過としてとらえることができる。

しかしながら，この計測可能な現実的な時間といわれるものは，決して唯一，絶対的な時間ではないのである。絶対的な時間といわれるものは，われわれが現実において重層的で多元的な時間のなかで生きているわずかな一局面であって，ある極限的な概念にすぎないのである。

改めていうまでもなく，われわれはたんなる自然的，空間的な時間や空間において生きているのではない。われわれが生きている時空間は，意識的，無意識的に生みだされたさまざまな制度を媒介にすることによって形成される文化的，社会的な多元的時間であり，空間なのであり，それは意味的時間，空間なのである。したがって，スポーツという文化的圏域において生起する時間や空間は，当然のことながら文化的，社会的な意味をもっているのである[34]。つまり，スポーツの世界においてわれわれは，さまざまなルールによって規定され，条件づけられた外的，現実的な時間や空間を運動感覚的に身体に受容することによってそれらを超越し，内的な時間，空間の世界へと沈潜していくのである。こうした自由に息づき，生のゆたかな振幅を包摂した時間と空間を獲得することによって現実的な環境世界とのあいだに自由自在な距離をとることができるのである。それは，明らかにたんなる外的な時間や幾何学的な空間にとどまるものではないことを示している。その世界において時間は，ただ直線的，均質的で水平に流れ，経過していくものではなく，さまざまなリ

ズムと幅をもって進んでいくのである。

われわれがしばしば経験するように，現実的に計測された一定の同じ面積のコートでも時には広く，また時には狭くも感じとることがあり，さらにはゲームの時間を長くも，短くも感じることがある。このことは，コートの広さやネットの高低といった空間あるいはゲームの時間がすでに身体によって下書きされており，内面化され，身体性化された時間であり，空間であることを意味している[35]。

スポーツにおけるわれわれのこうした経験は，ある意味で過去指向的な地平と未来指向的な地平の只中におかれており，その両者を結合し，全体的な世界にかかわらしめているものは，既述のような時間的，空間的な結合であって，それを可能にしているものは構想力なのである。

われわれは，この構想力によって時間形態と空間形態を自由に創り出すことも，またそれらを支配することもできるのである。たんにスポーツや遊戯のみならず，たとえば創作ダンスやパントマイムなどにみられるように，さまざまな運動形態をある象徴的な表現形態へと昇華させることによって時間と空間を自らのものにすることができる。

この時間と空間を支配するということは，スポーツにおいてコートやタイム等の物理的時間や幾何学的空間を超越し，スポーツ一般にとって核心的な性格であるドラマ的な性格もしくは非日常性を獲得することをあらわしている。そして，この非日常性とは，現実的時間，空間がもつ怠情や受動性から飛躍し，日常性のなかに新しい緊張を生みだす時間でもあり，空間でもある。

いいかえるならば，スポーツとは意図的にカイヨワのいうイリンクス（Irinx　眩暈）の状態をつくりだして「現実の深淵をのぞいたり，日常に存在しえない困難を設けて心身を緊張させる行為[36]」であるといえる。それは，たとえばスキーやスケート等に象徴的であるように，スピードという時間，空間にたいする緊張と躍進へと日常性を変換させる技術的行為にほかならない。

われわれが常にスポーツの世界において体験するように，スポーツのいわば遊戯的な時間と空間の振幅のなかで身体は，その生理学的，解剖学的な限界を超えて，他律的な身体に規制され，自己に対立する日常的な身体のもつ物質性を解脱し，主体的な身体としてすぐれて精神的な世界，すなわち無限の身体的時間と空間の拡がりをもつ世界を感得することができるのである。この世界は，「マ」と呼ばれる世界であり，中井は，「生きていることを確かめる時間の区切り，切断，響き[37]」であるといっているが，それは時には一外国人であるヘリゲルが弓の技術的彼岸に禅の世界を発見したように，ある宗教的な時間と空間の意味さえもつにいたるのである。

メルロ・ポンティは，ある「行為のなかでの精神と身体の融合，人格的実存への生物学的実存の昇華，文化的世界への自然的世界の昇華は，われわれの経験の時間構造によって同時に可能にもされていれば一時的なものにもされている[38]」とかいているが，身体とは所与としての時間と空間を創造的な時間，空間形態にまで昇華させていく自己表現の原理であるといえるだろう。その意味からも人間的世界における時間，空間の問題は，文化との総体において改めて問い直される必要があるだろう[39]。

2．スポーツにおける道具の身体性

ジョン・ルイスは，「道具はたんに，あるいは主として人間を環境に適応させる手段ではなく，新しい環境をつくる手段なのである。それは人間の要求に役だち，人間的価値を体現し，人間精神の文化的，イデオロギー的達成を反映しているのである[40]」といっているが，この道具に関するルイスの見解は，そのままスポーツの道具の属性についての理解にもつながる。

ラケット，グローブ，バット，スキー，スケート等といったさまざまなスポーツの用具は，たとえばカップが道具のなかに身体器官の射映をみたように，手や足といった身体四肢の射映である場合が多い[41]。スポーツにおいて拡がりをもち，主体として生きている身体は，この身体器官の射映である道具によって媒介され，より拡大された身体へと飛躍する。「構想力の飛躍によって道具はイデーとなる[42]」と三木清はいっているが，道具がたんなる無機物としての存在であることをやめ，ある意味で「玩具」になったり，一定の理念として生命的な意味をおびるのは，その道具を背景から支えているスポーツあるいは遊戯的な構想力によって一定の仮構的な適在性を獲得するからである。バットがたんなる棒切れであることをやめ，まさに「バット」になるのは，より具体的にはルール体系によるのであるが，そのルール体系は明らかに構想力の産物にほかならない。

スポーツにおける身体と道具のあいだに存在する相互の指示関係は，基本的にはルール体系と身体運動，すなわち知覚，感覚的局在性の事実的所与，そして道具のもつ形態，性質といった所与性によって規定され，逆に道具を指示することになる。しかしながら，このような身体と道具の相互の指示関係は，三木清が「習慣性[43]」と呼んだように，反復，練習の過程において相互が有機的に結合され，活動する主体としての身体そのものの内につつみ込み，内面化され，身体性化されるとき，この身体と道具の相互の指示関係は解体し，道具は身体に受肉される。その結果，道具はあたかも身体の一部と化し，グローブ，ラケット等は，あたかも自らの手であるかのように，またスキー，スケート等は，まるで自らの足そのものであるかのように振舞い，身体の延長において身体と道具の指示関係は消滅する。

われわれがスポーツの道具にたいして自らの手足のごとく愛着を感じ，また他者の使いなれた道具にある人格さえ感じとることができるのは，そうした理由によるものである。

したがって，「身体系の意味は，私の知覚の場所がそのつどの属自性（Te-meinigkeit）を所有しているところにあるのであって，生理性や有機的構造にあるのではない[44]」のであり，「単的にいって身体としての私の手は必ずしも肉と骨からできあがっている必要はないのであって，もし金属からなる義肢体にも親密な属自性を所有できるとしたら，この義肢体は現象学的にいって私の身体となっているのである。[45]」スキーやスケートは，明らかに一種の義肢体にほかならず，ラケットやスティックは義手そのものであると同時に，スポーツの世界においてそれらは身体そのものになりきっているのである。

われわれが一般にいうところの「身体で覚える」ということばは，道具が身体にたいして一つの拮抗関係として経験される存在であることをやめ，「身体と共働する道具と身体の没指示関係[46]」を確立していく過程をいいあらわしている。

われわれは，こうした「身体体制」あるいは「組み込み」によって中心化――脱中心化の相互変換の過程を振幅し，メルロ・ポンティが呼んだあの象徴形態としての行動へと上昇するのである[47]。

身体と道具におけるこの対立関係の消滅が全般的なスポーツの世界において一定の包括的な意味連関のうちにある場を占め，想像的な適在性や役割機能をもつであろうことは，われわれが常に経験するところである。われわれは，日常性と非日常性にかかわる自由な変換の仕方をこの道具に託し，可能にも不可能にもされている。

道具との身体体制が確立されないときにわれわれは，自らの身体を非常に狭く，かつ重いものとして知覚し，解剖学的空間あるいは現実的な時間，空間に停滞している二元的な身体を意識する。しかし，ひとたび身体体制が確立されると，われわれは，身体の鈍重な解剖学的，生理学的図式を超越し，広大な生的時間や空間へと飛躍しつつある自己の身体を知覚することができる。その世界

は，東洋的心身論でいうところの心身一如，無心，無我の境地として表現される世界に通ずる。

ホイジンハがこれ以上解体しえない概念であるといった「おもしろい」という世界は，まさにそうした身体性の世界を示唆しており，ここで問題にされる身体は，明らかに生理学が問題にするところのあの客観的，対象的な身体ではない。

3．スポーツにおける集団の身体性

スポーツの技術を構成する既述の時間，空間あるいは道具等は，決して孤絶的には存在しえず，スポーツ共同体によって背景から支持されている。

それは，スポーツがその構想力を媒介にしながら，相互主観的な交通の場を形成することによって成立する文化体系であるからにほかならない。

スポーツのゲームにおいてある一定のポジションを占めるプレイヤーなり，あるいは観衆は，それぞれの役割の交換を通して自己――他者の行動をとらえ，そのことによって自らの存在が支持されるのである。一般にわれわれは，自己の裡の他者と対話することをとおして自己との対話が可能になるのであり，また役割を役割たらしめている約束なり，ルールを媒介としながら全体との緊張において自己を確認するのである。

人間相互を理性の普遍性において結びつけているものは，一般的には概念的コミュニケーションであるが，人間と人間を相互に感性の共同性において結合しているものは，ほかならぬイメージ・コミュニケーションであり，この両者を統一的に結びつけているものが構想力なのである。そして，このコミュニケーションにとって特徴的なことは，お互いがすでに認識していることを交換し合うだけではなく，他者との交通の過程で新たな系を再構成しながら未知の意味を分節化し，それを媒介として新しい自己へと変革し，再統合していく過程でもあるということである。

三木清は，「歴史哲学」のなかで生理学的対象としての客観的身体を「個人的身体」として規定し，これにたいして身体的行為がある社会的関係のもとで一定の意味と社会的機能をはたすという立場から「社会的身体」という概念を提起したが，他者との交換の過程で新たな自己へと再統合していく身体とは，まさに三木のいう「社会的身体」を意味しており，スポーツにおいて具体的に生きている身体とは，そうした身体である[48]。

スポーツの世界においてわれわれの身体は，他者の行動を自らの行動として共有するとともに「他者の行動の場を自らの場として生きる[49]」のである。スポーツのゲームにおいて日常的に経験するように，たとえばバスケット，サッカーあるいはバレー等の集団的なスポーツにおいて自分のパスやトスがシュートあるいはアタックに連ったとき，あたかも自らがシュートし，アタックをしたような感覚にとらわれたりするのはその恰好の例である。スポーツにおけるあの緊張とまなざし，喚声身振り等は，他者の身体的行動やその表現の意味あるいは他者の感覚，精神状態をある皮膚感覚を足場にしながら，イメージを観念的に下書きすることによって，すなわち「感情移入」によって他者の行動，経験そして感覚的世界をも身体的に感得し，内面化するものであることをあらわしている。スポーツにおけるこうした身体性の世界は，主体の成立にとって自己を客体としてみている自己の視点と客体としての他者の視点との交換の可能性が自覚されなければならないことを示している。メルロ・ポンティは，他人にたいする知覚は，まず他人の志向が自己の身体を通して働き，また自己の志向が他人の身体を通して活動するという「志向的越境」としてはじまるといっているが，われわれは，主体と対象（客体）とを相互にいれかえ，その相互変換の過程を通して自己の身体図式をつくりあげていくのであり，これが発達といわれるものの核心的な契機にほかならない[50]。

われわれは，技術を媒介としながら他者――それは味方のメンバーであったり，相手チームのメンバーであったり，時には観客であったりするが――との相互の交換をもつことによって自らの身体を確認する。失敗にたいする他者の「まなざし」にたいるす羞恥と恐れ――いわゆる「あがり」――あるいは成功や勝利の喜びといった感情，それらは実は身体への圧迫であったり，身体的空間の拡がりであったりするという身体性の表現なのである。

このようにスポーツの技術過程には「私の行動」と「他者の行動」という二つの項をもちながら，しかも両者を一つの全体として働く統一的な系の存在を予想させるものがある。

ルノーがいうように，スポーツの集団とは，各メンバーが単に数量的に加算されたものでも，また各個人の技術の戦術的な累積だけのものでもない。各個人の技術的運動は，チーム・メンバーの相互のコミュニケーションと運動相互の交渉の網の中へ一体化され，統合されているのである[51]。スポーツにおけるコンビネーション・プレイといわれる集団的な技術は，そうした身体的な基盤に支持されることなくしては成立しえない。市川が指摘するように，われわれのこうした応答的な役割同調は，単にスポーツのみならずダンス，演劇，合奏のほかさまざまな集団的労働や知的作業の深層において緊密かつ適確な社会的関係を成立させている基本的な心理的，生理的過程なのである[52]。

このように主観と客観の解離とその統一というある意味での原始感覚をスポーツにおいて体験とすることを特徴としている[53]。スポーツの技術は，そうした原始的な感覚を初発的な基盤としており，ただひたすらに孤絶的に存在することはできず，相互主観的な共同存在の場を構成し，イメージ・コミュニケーションの関係のなかにはじめて存在するのである。このようにスポーツとは，感情の同じ型あるいは様式を共有しうる人々から成る共同性を基礎とした文化体系にほかならず，こうした感情の共同性を基盤としているがゆえに，言語を介することもなく，また社会体制，民族，国家的イデオロギーの相違を超えて国際的に共同しうる可能性をもっているのである。スポーツの技術が一定の社会的概念のうちに把握されるべき理由がここにある。これにたいしてスポーツの技術に関する機械論的な解釈は，個人と共同性を融合し，統合する身体性の領域を物象化するとともに交換可能な身体を捨象し，物理的空間へと矮少化することによってその潜在的な可能性を否定してきたのである。

4．スポーツにおける技術制度の身体性

もともとスポーツといわれる人間の文化的，技術的行為の体系は，自然的世界にたいして人間の刻印を捺し，自然界を人間化し，自己のものにすることであり，中井のことばをかりれば自然的秩序を人間的秩序に変換することであった。そしてその変換の技術は，既に述べてきたように主観――客観，現実――非現実の相互媒介の過程を辿り，第二の自然，つまりある具体的な社会的存在として，一つの環境を構成する制度として存在する。

ただスポーツの技術制度にとって特徴的であるのは，仮構的，非現実的そして想像的なものとして「人間の無意識あるいは下意識的な秩序形成の産物[54]」であるという点にある。しかもこの技術制度は，「見えない制度[55]」として習慣や感情などの透視されたシステムを前提とし，日常性の背景にありながら，しかも日常性と結びついたものとしてあらわれてくるのである。

われわれが日常性の世界にとどまっているかぎり，またスポーツの虚構的世界へ深く沈殿しているかぎり，スポーツの技術制度はわれわれにとって眼には見えない，実体のないものとして存在し，われわれの意識にのぼることもなく，かつ対立するものでもない。しかしながら，そうした眼には見えないスポーツ制度が時にわれわれにたいして物理的，社会的あるいは国家権力的な拘束力をも

って抵抗し，対立する「モノ」として存在するようになる。それは，日常的にはルール規範にたいする違背であるとか，スポーツ集団が目的――結果に拘束されたときとかであるが，特にその虚構的な世界が政治的イデオロギーによって浸喰されるとき，より巨大な力をもってわれわれを抑圧する。

その結果，象徴的で透明なはずのこの制度は，現実的，物理的な力をもってわれわれの内に喰い込み，本来スポーツがもっている共同構想力あるいは共通感覚的なコミュニケーションの過程は，その瞬間に解体し，身体の物象化，肉体化が浸透し，非日常性の世界は消失する。

スポーツの技術過程をその根底から支えている生理学的，解剖学的な客観的身体の超剋という身体の主体化の過程は阻止され，われわれの身体は，現実的で重々しく，自己になじめない疎遠な肉体へと転落する。その結果，スポーツの技術制度は，自己に対立する全く疎遠なものとしてまさに孤絶的に存在するだけである。

あ と が き

体育教育学の構想という今日の課題は，改めて言うまでもなくそれが身体に直接的にかかわる教育領域であるがゆえに身体を総体的に把握する視点を確立することなくしては解決しえない問題である。それにもかかわらず戦後の理論研究を概観すると身体「運動」や「技術」をその対象としながらも，そこからは「身体」の問題は，完全に欠落してしまっている。たとえ身体の領域が問題にされるにしても，その身体とはしばしば指摘してきたように物理的刺激によって支配される機械的な身体や生理学的，医学的対象としての身体であり，デカルト的な身体空間の限界を出ることはなかった。また「精神」的領域が考慮にいれられたにしても，それは，あくまでも身体にたいする対概念として二元的にとらえられ，運動過程における物理的，力学的要素を補完するものとして二義的に評価されてきたにすぎない。

身体ならびに技術に関するこうした機械論的な解釈は，全般的な体育の実践に多くの弊害をもたらしてきた。すなわち，子どもの身体的実存を点と線に解体し，身体を無性格もしくは中立的なものとしてとらえるとともに学習過程や教材系統を機械的な因果律で律しようとする，いわゆる注入主義，形式主義を浸透させてきた。そこには明らかに方法主義的な体育の限界があらわにされている。

体育教育の究極的なねらいは，子どもたちが身体文化――教材をその身体性において共有することであり，その文化的時間と空間を身体において把握し，身体を自己のものとして覚醒させることにほかならない。その意味からも体育教育学の構想という課題は，身体の問題を基本的な命題として今後検討されていく必要があると考える。

註

（1）鳥取大学教育学部研究報告　（教育科学）第22巻　第1号　1980

（2）「将来の哲学の根本問題」　村松一人　和田　楽訳　岩波文庫　昭和50年　p41

（3）同上書　p68

（4）たとえば真木悠介は，人間の欲求と層位を構造的，立体的にとらえ，「あそび」「スポーツ」を「即自欲求」の派生体であると規定し，「生命体の本原的な欲求の追求の過程において人間が獲得してきた，身体的，感覚

的，認識的および意志的な諸能力の自立的，自己目的的な展開と享受」にその特徴があるといっている。そして，これらの欲求は，絶対的な必要の位相をもたぬというところに固有の特質があり，「有効性のかなたにあるもの」としている。(「人間解放の理論のために」　筑摩書房　1976　p 106)

(5)「シラー美学芸術論集」　石原達二訳　富山房百科文庫　昭和52年　p 134

(6) 同上書　p 134

(7) 同上書　p 135

(8) 同上書　p 164

(9) 同上書　p 216

なお大沢は，シラーのこの感性的衝動概念が19世紀の生の哲学における生命概念の先駆であり，またフロイドの心的構造における快楽原則を予言したものであって，シラーのこの独創性，革命性が，マルクスを超える地点に到達した秘密があると評価している。(「労働と遊戯の弁証法」　紀伊国屋新書　1975　p 20)

(10) 三木清は，この構想力を神話，技術，制度といった社会的集団を統御する現象に即してとらえているが，もともとカントの術語で想像力と同義語である。近代の理性哲学は，感性的な力は理性によって支配され，従属されるべきものとして規定したが，これにたいしてカントは，過去に経験した事象とは異った新しい心象を想像を想像する力を「創造的想像力」としてとらえ，これを構想力と呼んだ。その後ベルグソン，フロイドによる深層心理の発見は，想像力にたいする近代的理解の限界を突き破ることになった。(「現代哲学事典」　山崎正一　市川　浩編　講談社現代新書　昭和45年　p 232　p 402)

また堀内守は，人間が世界に働きかける過程，すなわち（1）対象のあり方に従いつつ（受動性），（2）これを変革することによって（能動性）（3）自己みずからも変革される（自己変革）という過程に働く力を構想力であるとし，「教育構想力」という概念を提起している。(「教育思想の歴史」　日本放送出版協会　昭和50年　p 202)

(11)「遊び――遊ぶ主体の現象学」　佐藤信夫訳　白水社　1974　p 82　傍点引用者

(12)「遊び――世界の象徴として」　千田義光訳　せりか書房　1976　p 305

(13) 同上書　p 310

(14) 同上書　p 318

(15)「構想力の論理」　「三木　清」　久野　収編　現代日本思想大系　33　1966所収　p 344

(16)「美学的空間」新泉社　昭和48年　p 176

(17)「授業の心理」　ドベス，ミアラレ編　波多野完治　手塚武彦　滝沢武久監修　白水社　1978　p 269

(18)「引裂かれた心と身体」　池見西次郎監修　新里里春　岡　秀樹訳　創文社　昭和53年　p 270

またローウェンは，分裂質の者は自己の身体のコントロールを確立するためにスポーツや身体を動かしたりするのであって，行為や行動そのものの楽しみのためにするものではないこと，つまりスポーツを楽しむ力がないために，パーソナリティの統合性が脅かされ，その代償として意志を介して精神力で自己の身体にたいする直接的な支配を強めようとするものであることを指摘している。(同上書　p 45)

(19)「精神としての身体」　頸草書房　1975　p 192

(20)「共通感覚論」中村雄二郎　岩波現代選書　1979　p 262

(21) 同上書　p 262

(22) ドベス，ミアラレ編　前掲書 pp 266～267

(23) 同上書　p 267

日本的な競技についてしばしばいわれる「型から入る」ということの本質は，逆に「型から出る」ことを意味しており，模倣の存り様をよく表現している。

(24) この点で須藤敏昭の疑問を考慮に入れる必要がある。須藤は，武谷の技能に関する「生産実践における主観的法則の意識的適用」という規定のなかで「主観的法則」の意味内容が曖昧であるとその限界を次のように指摘している。「もともと『適用説』は技術の主体的側面に焦点をあてた規定であり，これとは別に（これを対置するかたちで）技能を規定しようとすることに相当な無理があるように思われる。客観的法則性の認識を生産実践において現実に適用しようとする局面で労働手段と技能が不可欠になるのだから，技能は『適用説』による技術規定の一環をなすものと考えられるべきだと思う。」(「遊びと労働の教育」　青木書店　1978　pp 176～177　傍点須藤)

(25)　「身体」　湯浅泰雄　創文社　昭和52年　p 75
(26)　「人間学の探究」　亀井　裕　滝浦静雄他訳　紀伊国屋書店　1970　pp 219～220
(27)　「生命あるものについて」　アーノルド・ポルトマン　八杉一郎訳　紀伊国屋書店　1976　p 220
(28)　湯浅泰雄　前掲書　p 78
(29)　同上書　p 78
(30)　「美と集団の論理」　久野　収編　中央公論社　昭和37年　p 43
(31)　同上書　p 43
(32)　同上書　p 43
(33)　前掲書　p 55
(34)　このことから人間の身体運動は，純粋に環境的世界との断絶，孤絶において存在するものではないといえる。ルノーがいうように，それは，象徴世界との「関係の中の運動」であり，「空間の中に自己の身体を展開させると同時に身体自身がことばを語っており，文字を表現しているといい得るからである。動くこと，それは学齢前の児童にとっては自己の足跡によって空間を満たすことなのであり，そこには目で見ることでコミュニケートすることが可能な自己の足跡という象徴的図形によって空間を支配するという出来事が生じているのである。

この段階において運動行為と表現行為とは不可分のものであり，ワロンがいっているように図形とは身振り動作の延長されたものなのである。」(ドベス，ミアラレ編　前掲書　p 274)またルノーは，「ある紙とか図形の上部と下部とは最初には身体の縦軸の垂直方向に基づいて経験されるのであり，人間はたえず運動空間から図形空間へ移っていくのである」といっている。(同上書　p 273)
(35)たとえば，器械体操にみられるように幅10cmの平均台のうえでさまざまな転回や宙返りが可能なのは平均台の幅が内面化され，身体内化されているためであり，熟練した競技者にとってはたんなる10cmの空間より拡大された空間として知覚されているからにほかならない。
(36)「芸術　変身　遊戯」　山崎　正　中央公論社　昭和50年　p 188
(37)「美学入門」　朝日新聞社　1975　p 40
(38)「知覚の現象学　I」　竹内芳郎　小木貞孝訳　みすず書房　1969　p 152
(39)ルノーは，身体の時間的，空間的関係について次のように指摘している。「学齢前の児童にとって自分自身の身体とは，空間と時間の中で行動の方向を発見し探求し，時空間を構成し，あるいは記号表徴をつくりあげて交渉し合うための中心的基準点となっているのである。この身体図式の精度を向上させ，時間的，空間的に構造化させることは，児童が論理の領域に近づくためのまず第一に不可欠な条件なのである。」(ドベス，ミアラレ編　前掲書　p 272)
(40)「人間この独自なるもの」　野島徳吉　恵子訳　紀伊国屋書店　1976　p 134
(41)この射映(project)の概念は，19世紀フランスの幾何学者モンジュの創案によるものであるが，カップは，この概念を技術にひきよせて道具は全て人間身体器官の外界へ射映されたものとして器官射映と呼んだ。(「技術の哲学」　三枝博者　岩波全書　1974　pp 224～231)

また三枝は，道具ということばは「ある遂行の手段」として日本語の「道」と同義語であり，「そこへもってゆく仕方」の意をあらわしていると説明している。(「同上書」　p 16)
(42)久野　収編　前掲書　pp 340～341
(43)三木は，習慣の本質を次のように規定している。「習慣は生理的機能と同じく環境を使用し合体する仕方である。習慣は一つの技術である。技術は主観と客観との人間と環境との統一を意味している。」(久野　収編　前掲書　p 306)そして，道具，習慣，身体の関係について「道具は身体の部分に，結結びつけられている故に，その技術においては習慣が重要な意味をもっている。習慣はいわゆる第二の自然として道具並びにその技術を身体と有機的に結合するのである。その意味において道具の技術は単に機械的でなくむしろ，有機的であるということもできるであろう。道具の技術は人間と有機的に結合したものである故に，その技術には個性的なところが多く，従って道具によって作られたものは或る芸術的な意味をもっている」といっているが，スポーツの技術が芸術的対象になりうるのは，こうした理由による。(「技術哲学」三木　清全集　岩波書店　1967　p 239　傍点引用者)
(44)「知覚と身体の現象学」　湯浅慎一　太陽出版　昭和53年　p 82

(45) 同上書　p 82
(46) 同上書　p 192
(47) 市川は，一般に動物の行動は「事物に対する行動」と「他者に対する行動」とに区別されるが，人間的行動は，道具を組み込むことによって「仲だちされた行動」へと変換し，自然的生を超える契機をつかみえたが，動物に運具の使用を妨げているものは，この視点の変換という可能性をもちえない限界によるという。（市川　浩　前掲書　pp 168～176）
(48)「歴史の概念」　久野　収編　前掲書所収　pp 208～210
(49)「人間の哲学」　岩波哲学講座 3　城塚登編　1973　p 37
(50)「眼と精神」　滝浦静雄　木田　元訳　みすず書房　1969　pp 135～136
(51)ルノーは，集団と身体を次のようにとらえている。「身体表現における身振り動作は，参加メンバーがその『出合い』における『今，ここで』創作するものであり，そこに関与させてもよい基準としては，運動に必然的に含まれるところの運動の意味があるだけである。グループダイナミックスの中にあるために（身体表現はグループの中においてしか実施され得ない），身体は一時的に生産性を失っている。メンバー間の空間はもはや無色中立的なものではなくて，想像上の出合いをさせやすいものとなり《対人場面運動的な感情移入》のためのもっとも好適な場面となっている。そこで，ここに生ずるところの身体的コミュニケーションの間の結びつきという問題に注目すべきである。」（ドベス，ミアラレ編　前掲書　p 271）
(52) 市川　浩　前掲書　p 189
(53) 発達における主観と客観の分離の過程とその様相については，メルロ・ポンティの「幼児の対人関係」（「眼と精神」所載）を参照されたい。
(54)「哲学の現在」　中村雄二郎　岩波新書　1977　p 179
(55) 同上書　p 174

参　考　文　献

「行動の構造」　メルロ・ポンティ　滝浦静雄　木田　元訳　みすず書房　昭和 43 年
「言語と身体」　滝浦静雄　岩波書店　1978
「弓と禅」　オイゲン・ヘリゲル　稲富栄次郎　上田　武訳　福村出版　1976
「時間論」　三宅剛一　岩波書店　1976
「スポーツの哲学」　滝沢克己　内田老鶴圃　昭和 36 年
「身体の現象学」　市川　浩　河出書房　1977
「哲学的人間学」　茅野良男　塙新書　1975
「想像の現象学」　滝浦静雄　紀伊国屋新書　1975
「時間――その哲学的考察――」滝浦静雄　岩波新書　1976
「構想力の時代」　掘内　守　福村出版　1979

（昭和 55 年 9 月 16 日受理）